

次に、聴覚障害児教育の分野から、「VRに望むこと-聾児の言語指導と吃音矯正-」と言う内容で、庄司先生（北海道大学電子科学研究所）から御講演を頂き、聴覚障害児や学習障害児の教育における感覚統合を積極的に利用した学習の大切さと、その学習に必要な適切な感覚情報や情動情報のフィードバックにVRが有効であろうとの指摘をいただきました。

視覚障害教育の分野からは、「VRに望むこと-視覚障害教育の立場から-」と題して、田中良広先生（北海道高等盲学校）は、視覚障害の考え方や盲学校で行われている歩行訓練や感覚訓練について説明していただき、VRの導入を期待する現場の具体的なニーズとして、歩行訓練環境、バーチャル美術館やバーチャル運動空間を挙げていただきました。

最後に、スポーツ教育の分野から、「体育教育からVR技術への期待」と言う内容で、川初先生（北海道大学体育指導センター）から、ヒトの各種運動機能トレーニングは如何にあるべきかを、スキージャンプの実例に基づき解説していただき、また、VRシステムは、スポーツ能力向上に貢献できる可能性を充分に秘めているとのご指摘もいただきました。

以上、福祉や教育の現場の4氏からの提言から、今後益々、VRに対する「大きな期待」があることを確認でき、またVRの将来への展開が楽しみになるシンポジウムでした。

(2) 懇親会と研究室ツアー

堅田秀生

会場担当（MRシステム研究所）

「懇親会」

学会二日目、20日（木）の18：30からサッポロビール園ビール博物館スターホールにて懇親会が開かれた。参加者は185名と過去最大であり、バス4台にて学会場から移動した。料理もバイキング形式で、タラバ・ズワイカニ、刺身盛合わせなどの魚介類を中心に14種類、ビールは工場のできたて生ビールであり、心ゆくまで飲んで食べていただいた。参加者のお腹がある程度充たされてから、挨拶・乾杯の音頭がおこなわれた。それに続いて小川基さんと嵯峨治彦さんによりアイヌ・モンゴル伝統音楽の演奏が披露され、会長と大会長まで巻き込んだリムセ（アイヌの踊り）のお祭りで終了した。その盛り上がるのまま、来年の大会の紹介で閉会となった。

「研究室ツアー」

学会日程終了後の21日（金）13時から15時まで、5カ所の研究室・研究所の公開をおこなった。当日は幸いにも晴天で、短い時間にも関わらず、いずれの研究室・研究所とも多くの見学者で賑わっていた。公開場所ならびに主な内容は以下の通り。

- ・工学部 複雑系工学講座 自律系分野：アルゴリズムの開発と計算機シミュレーションを基にした自律・分散情報処理のアメリカロボットや筋電インタフェースの研究について、デモを用いて紹介がなされた。
- ・工学部 制御情報工学講座 生産情報工学分野：曲面モデルを実際に触ることのできる力覚呈示装置を用いて、VRのCAD/CAMへの応用について説明がなされた。
- ・医学部 中央研究部 神経機能検査室：コンタクトレンズ型のサーチコイル法を用いた定量的な三次元眼球運動計測システムとその結果が紹介された。
- ・エム・アール・システム研究所（札幌分室）：180度の視野をカバーする3面アーチスクリーンと6軸のモーションベースからなる複合現実感刺激呈示システムによるVR刺激体験、そして、視機能検査・自律神経検査・平衡機能検査の機器説明などが行われた。
- ・電子科学研究所 電子情報処理部門 感覚情報研究分野：感覚系に障害のある人や高齢者用の支援工学機器のデモ・体験がおこなわれた。

最後に、この場を借りて、研究室ツアーに協力して下さった研究室・研究所に感謝の意を記しておく。

(3) 展示報告

上見憲弘

作品展示担当（北海道大学）

「企業出展」

本大会では22社の企業に参加していただき、VR環境の呈示装置やその呈示による影響を調べるための計測装置など、VRに関わるさまざまな最新の装置を紹介していただきました。HMDなどの視覚情報呈示デバイスの出展